
御坂「レベル0の分際で・・・！！」

チルノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御坂「レベル0」の分際で・・・!!」

【Nコード】

N2456V

【作者名】

チルノ

【あらすじ】

上条が、殴った大切な少女を上条は救おうと必死になる・・・

上条が駆け回るその時に上条のまえにあらわれたのは・・・

上条当麻と少女が交差する時物語は始まる

(前書き)

こんにちは、チルノです！今回は前回ほど長くはありませんが・
楽しんでいただければ幸いです！！

上条さんの人脈と相手が可哀そうになるかもしれないがよろしく
お願いします！！ではどうぞ！！

御坂が、レベル0等自分より下の奴らを見下している設定で原作再構築。

上条当麻は、この日一人の少女を殴った、その少女は上条にとって
は大切で守るべき存在だった。しかし上条は、道を踏み外した少女
を救うため拳を握る……レベル0とレベル5の二人が交差す
る時、物語は始まる

上条「今日は補修も無いし、これといった不幸にも見舞われて
ないからいい日だね。」

ギャー、死ねええ！！レベル0の分際でええ！！~~~~~
！！！！！！

上条「……なんだか、穏やかじゃねえな。言葉から察するに、能
力者の無能力者狩りか？」

上条「つたく……不幸だ……でも行かないわけにはいかねえよな……
」はあ……

御坂「あんたらレベル0つてさあ？いつも問題起こせば能力者が憎
いだの言っけどさ？あんたらそれに見合う努力してんの？してない
よねえ！なんてつたつてレベル0だもんねえ！！あははははは！！
」

御坂「さっさと、帰りたいから一瞬で終わらせてあげろ。黒焦げになつて地面に這いつくばれ！無能力者が！！！！」

上条「はっ！お前こそそこで何やってんだよ！」

御坂「！？」ばっ！

御坂「あんた！もしかしてこいつらの仲間？なら容赦しないけど？」
ギロツ

上条「残念ながら、そいつらとは初対面だ・・・」

上条「でも、お前のやってることは同じ無能力者として見逃せねえよ！」

御坂「あははは！！常盤台のエースにして学園都市の頂点！レベル5の第3位！！御坂美琴よ！？あんたには何も分からないわよ！」

御坂「だいたい！あんたらレベル0ってむかつくのよ！何の努力もしないで、能力者を逆恨み！拳句の当てには、関係も無い人を傷つける！能力者にたいして礼儀がなつてないわ！」

上条「御坂・・・お前・・・どうしちゃつたんだ・・・。」

スキルアウト「・・・？」

上条「いいか？よく聞けよ御坂・・・俺達は努力しなかつたんじゃない・・・できなかつたんだよ。」

スキルアウト「!!!？」

上条「お前らみたいに能力に目覚められず、自分の得意だったことに能力が加わるだけで自分のしてきたことが一瞬で壊される・・・」

上条「たしかに、レベル0の一部は能力者を妬み、誰かを傷つけたかもしれない！でも！それでお前らが俺達を傷つけていいことにはならねえ!!！」

上条「いいぜ！御坂美琴！お前がレベル0を見下して傷つけるって言うんなら！！まずは!!！」

上条「その幻想を　　ぶち殺す!!!!!!！」

御坂「・・・ふん!!」バリっ!!！」

御坂「何が！努力できなかっただ!!！なにが、大切だったものを壊されただ!!！結局はあんたらの才能不足だろうが!!!!!!！」ビリ
ビリ

御坂は、上条に向かって電撃を放つ、上条が理解できなかったから自分のしている事を真っ向から否定されたから。何より、自分には向かう無能力者が許せなかったから

しかし、その攻撃は幻想も空しく上条が手を振っただけでかき消された。

上条「・・・こんなもんだな。レベル5っても能力がなければただのガキだ!!！」

上条が走り出す、御坂は上条に向かい同じく電撃を放つしかしそれは途中でかき消される。

御坂「くそ！なによ！あんたまで！！このこのこのこのオ！！」

上条は御坂に近づく、しかし御坂はそれをなんとかして防ごうとする、磁力で砂鉄を生み出し砂鉄の剣を作り上条を切ろうと振り下ろす。しかしそれも上条が触れた途端砂鉄に戻る。

御坂「っ！？なんで！なんでよ！！死ね！なんであんたまでがアアアア！！！！」「ビリビリ！！！！」

上条「お前が見下してきた者、そいつの気持ちを　ちつとは思いい知れ！この大馬鹿鹿野郎が！！」

上条が御坂の目の前に踏み込む、そして御坂の顔めがけて思いっきり拳を振りおろす。

御坂「（信じない！信じない！信じない！信じない！信じない！信じない！信じない！信じない！！私がやられるわけがない！！！！ふっざけんなあああああ！！！！）」

御坂は自分がレベル0にやられることを認めなかった。認めたくなかった。しかし目の前の少年は悲しい表情で自分に拳を叩きこんだ。

ゴシヤア！！！！！！

上条「・・・少しは、思い知ったか。お前がしてきたことがお前の言ってる無関係な人を傷つける奴らとおんなじだってよ・・・」

上条は、御坂に話しかけたしかし御坂は気を失っている。

上条は振り向きスキルアウトに向き合う。

上条「怪我・・・ないか？」

スキルアウト「あ・・・おう。すまねえ・・・」

上条「こいつにも・・・多分事情があったんだと思う、仲間の事は酷いと思うが許してやってくれないか？」

スキルアウト「ああ・・・分かってる・・・もう俺も後ろは向かねえでもう一度努力してみるよ・・・」

スキルアウト「ありがとよ・・・えっと・・・」

上条「上条当麻　ただの不幸な無能力者だ。」

（1時間後）

上条「よっと、確かこつちの方だったよな。」

上条は御坂をおぶって常盤台中学女子寮に向かっていた。御坂の起きる気配はない、しかし上条は自分のしたことへのけじめをつけるために最後まで面倒を見ていた。

上条「あつた、ここか・・・」

寮監「・・・君、その後ろの子はうちの生徒じゃないか？」

上条「はい・・・ちょっとわけありで、送ってきたんです。」

寮監「そうか・・・訳を聴きたい、御坂を部屋に運んでる間寮監室で待っていてもらえるか？」

上条「はい、分かりました。」

その後、上条は寮監に御坂との出来事を話した。

寮監「そうか・・・実は御坂が無能力者を嫌っているのは訳があるんだ・・・」

上条「はい、俺もそうだと思ってました。それで？何があったんですか？」

寮監「あれは、一ヶ月ほど前だ・・・知つての通り、御坂はそれまでレベルも関係ない分け隔てなく友好を広げていた少女だった・・・」

~~~~~回想~~~~~

御坂「黒子！ごめん！まった？」

黒子「いえ、気にしないでくださいお姉様。さあまいりましょう、佐天さん達も待ってますわ。」

御坂「うん！！」

佐天「あ！御坂さ〜ん！白井さ〜ん！こっちです！」

御坂「佐天さん！ごめん！待たせた・・・！」

佐天「いえいえ・・・でも初春がまだいないんですよ・・・？」

白井「えっ？初春は私より早く支部を出てここに向かいましたのよ？」

御坂「・・・探しましょう！初春さんに何かあったのかも！！」

白井佐天「はい！！」

寮監「その後三人は親友を探して駆けずり回った。すると一つの情報が入った。『花飾りをつけた女の子がスキルアウトに路地裏へ連れて行かれた。』というものだ・・・」

上条「・・・」

寮監「そして」

白井「初春！！」バツ！

初春「あ・・・う・・・」「びくっ・・・びくっ・・・」

初春「・・・じ・・・らい・・・さん・・・？」とびくっ

寮監「そこで、白井が見た物はレイプされ白濁まみれの親友だったんだ。」

上条「!!!?!」

寮監「そのあと、御坂や佐天さんもその姿をみて悲しんだ。」

寮監「初春さんは今も精神病院に入院している。ただ何回も繰り返すんだ、『ごめんなさい!もうやめて!もう私を犯さないでえ!!』と。」

上条「それで・・・御坂達は・・・?」

寮監「佐天さんは毎日初春さんのお見舞いに行くようになった。白井は風紀委員として犯人を探している。そして御坂はスキルアウトを手当たり次第に攻撃し始めた。」

寮監「しかし、御坂ははじめはスキルアウトを嫌い、初春さんの為に攻撃していた。しかし今では・・・」

上条「スキルアウトと同様に無能力者を嫌い個人的に攻撃するようになった・・・ですか?」

寮監「ああ・・・」

上条「ふう・・・じゃあ、御坂はその犯人をこらしめればもとにもどるんですかね?」

寮監「さあな・・・御坂はそれでも無能力者を攻撃するだろう・・・し

かし私もどうすればいいか分からない・・・」

上条「・・・大丈夫ですよ。」スクツ

寮監「・・・？」

上条「犯人見つけ出して締め上げる・・・あとは俺があいつの相手をあいつの気が済むまでしますよ。」

寮監「上・・・条君・・・」

上条「必ず・・・元の御坂を取り戻して見せます！」ガチャ

上条「約束しますよ。」ボタン

寮監「・・・情けないな、私は・・・」

寮監「私にもできる事はあるはずだ・・・！！」

↳常盤台女子寮前↳

上条「さて・・・行くか！」

そこから上条の行動は早かった、自分の交流関係を周り、土御門や一方通行、ミサカ達にクラスメイト、小萌先生達教師陣など様々な人を伝って情報を集めた。その恐るべき人脈のおかげで、犯人はすぐに分かった。場所も人数も、そして動機も。

上条「こんな理由で一人の女の子が酷い目にあって、周りの友達  
苦しんでんのか……」

上条「いいぜ・お前らがしたことでも周りが傷ついていてもげら  
げら笑ってられんなら・まずはその幻想をぶち殺す……」

上条は相手の人数がケタ違いなのを見た、しかし行かないわけには  
いかなかった。玄関のドアを開けるとそこには  
心強い仲間  
がいた。

上条「！？土御門・一方通行！それにクラスみんなに、黄泉川  
先生達まで・それに神裂達まで来てくれたのか！？」

土御門「皆かみやんに救われて今があるぜよ。かみやんが困ってる  
んなら、この体死ぬまで使ってくれて構わないにゃー！」ニヤ

一方通行「三下のおかげで、いろいろ俺も救われたからなア、なん  
でもヤンぞオ！三下ア！」

その他大勢「そうだぜ！」「お前が俺達に今を与えてくれたんだ！」  
「いくらでも助太刀いたします！」「命の恩人をほおっておくほど  
ミサカ達も冷酷ではありませんとミサカは強く言い張ります。」「  
何と言おうと、俺らはお前の味方だ！」

この最高の仲間が揃えば上条はもはや負ける気はしなかった

リーダー「ぎゃはははは！この前の花飾りのガキはよかったなあ



上条「お前だけだな・・・」グッ

リーダー「くっ・・・!!」

上条「お前が、やったこと。覚えてるか？」

リーダー「・・・あ？」

上条「お前、前に一人の女の子・・・襲つただろ？」

上条「無理矢理犯して・・・その子の未来奪つたろ？」

上条「その子は今も病院で自分の中で戦つてんだぞ？その子の周りの友達も一緒に苦しんだぞ？一人は俺の知り合いだったが・・・自分が壊れちまうくらい苦しんだぞ？」

上条「俺は、お前を・・・許さない・・・!!」

上条が走る・・・リーダーは自棄になったのか拳を振りかぶり振り下ろす。しかし上条にはあたらず上条の拳はリーダーの顔に突き刺さり・・・リーダーを沈めた。

上条「人の苦しみを考えやがれ・・・このクソ野郎！」

その後、眼を覚ました御坂はまた外に出て、無能力者を襲っていた。そこへ



黒子「お姉様!!遅れますわ!!早くしてください!!」あわあわ

御坂「う・・・うん!いこう!黒子!!!」

御坂「佐天さ〜ん!!ごめん!待たせた・・・」

黒子「ごめんなさいですの・・・」

佐天「いいですよ。さあ・・・いきましょっか!」

御坂「ええ!!!」

三人の少女はいつも4人で集まる、あのクレープ屋へ歩く・・・そこには

初春「あっ・・・佐天さん達!!遅いですよ!!もう!!先に食べちゃってますよ!!!」

いつものように怒る親友が笑顔で待っていた。

そして、いつものように、四人の少女は、笑って歩き出した

〈 f i n 〉

## 後日談

上条「ありがとな！皆！俺の為に集まってくれて！！」

一方通行「気にすんなよ！俺達が勝手にやったことだア！」

全員「そうですよ！気にしない！」

土御門「それだけ、みんなかみやんが大切なんだにやー、かみやんが救ってきた分、皆がかみやんを救おうとするんだにやー！」

上条「そうか・・よかった！じゃあ、みんなまたなんか会った時はまた助けてくれるのか？」

全員「あつたりだ（ア）（です）！！！」

上条「ハハハ！幸せだあああああああ！！！！！！」

ん〜

〜後日談 f i

(後書き)

よんでくれてありがとうございます。今回は綺麗に終わらせたいな  
くと思ってきました。しかし最終的に綺麗に終わったかと言え、か  
なり微妙です。ではまた次の作品でお会いできればいいです!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2456v/>

---

御坂「レベル0の分際で・・・！！」

2011年7月27日06時32分発行